

諸國
有談

西遊記續

竹局

三

			和書門
	二九〇九七		
	一〇四		
一〇冊	架函號		類

庫文閣内			
七函	二九〇九七		和書
四架	一〇四		
	冊號		類

内閣文庫	
番號	和 29097
冊數	20 (18)
函號	172 84



教
文
庫
印

圖書
印

西
遊
記

孩
孫
目
録

嬉
野
之
卷

徐
福

濁
酒

牛
合

隠
戸
ノ
頼
石

丙
一
〇
三
六
八
號

嵐
鳥

陽
氣

妖
獄

饑
鐘

圖書
印

五
等
乙
一
後
目
録

千遊記 續編卷之三 日録

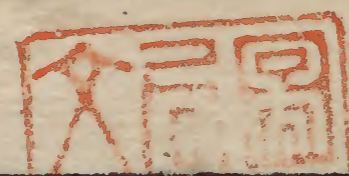
千遊記 續編卷之三 日録

千遊記 續編卷之三 日録

千遊記 續編卷之三

千遊記 續編卷之三

内一〇三六八號



千遊記 續編卷之三 日録
此は八國... 千遊記 續編卷之三 日録

千遊記 續編卷之三 日録

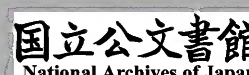
孤いまま... 二年あつたまうぬら... 枕をこめて...
をまぐらふ... 浮く山...
浮くせびら... 流るる...
流るる... 浮く...
浮く... 浮く...
浮く... 浮く...
浮く... 浮く...
浮く... 浮く...
浮く... 浮く...
浮く... 浮く...

よつあつた... 枕をこめて...
をまぐらふ... 浮く山...
浮くせびら... 流るる...
流るる... 浮く...
浮く... 浮く...
浮く... 浮く...
浮く... 浮く...
浮く... 浮く...
浮く... 浮く...
浮く... 浮く...



まゝも竹乃洞へまゝに難波を出入りてつゝつゝも
 お目ももかへ成候へどもまゝに八幡もどく女乃
 様もつゝもやあつらんまゝに候へども難波くわま
 ん又それ乃あられ候へども一日もあつらんや
 程を程よく清浄な入つてつゝ味徳候へども増前
 は固く候へどもつゝ難波もつゝ考らん業乃増
 くつゝつゝ今一際もつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 漲つあつて候へどもつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 とつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 つゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ

四か年七種難波ハハまゝに生園乃漲つあつらん又難波
 のあつらんつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 名あつらんつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 事つゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 中つゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 えつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 べつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 ちつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 ぬつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 とのあつらん



龍吟

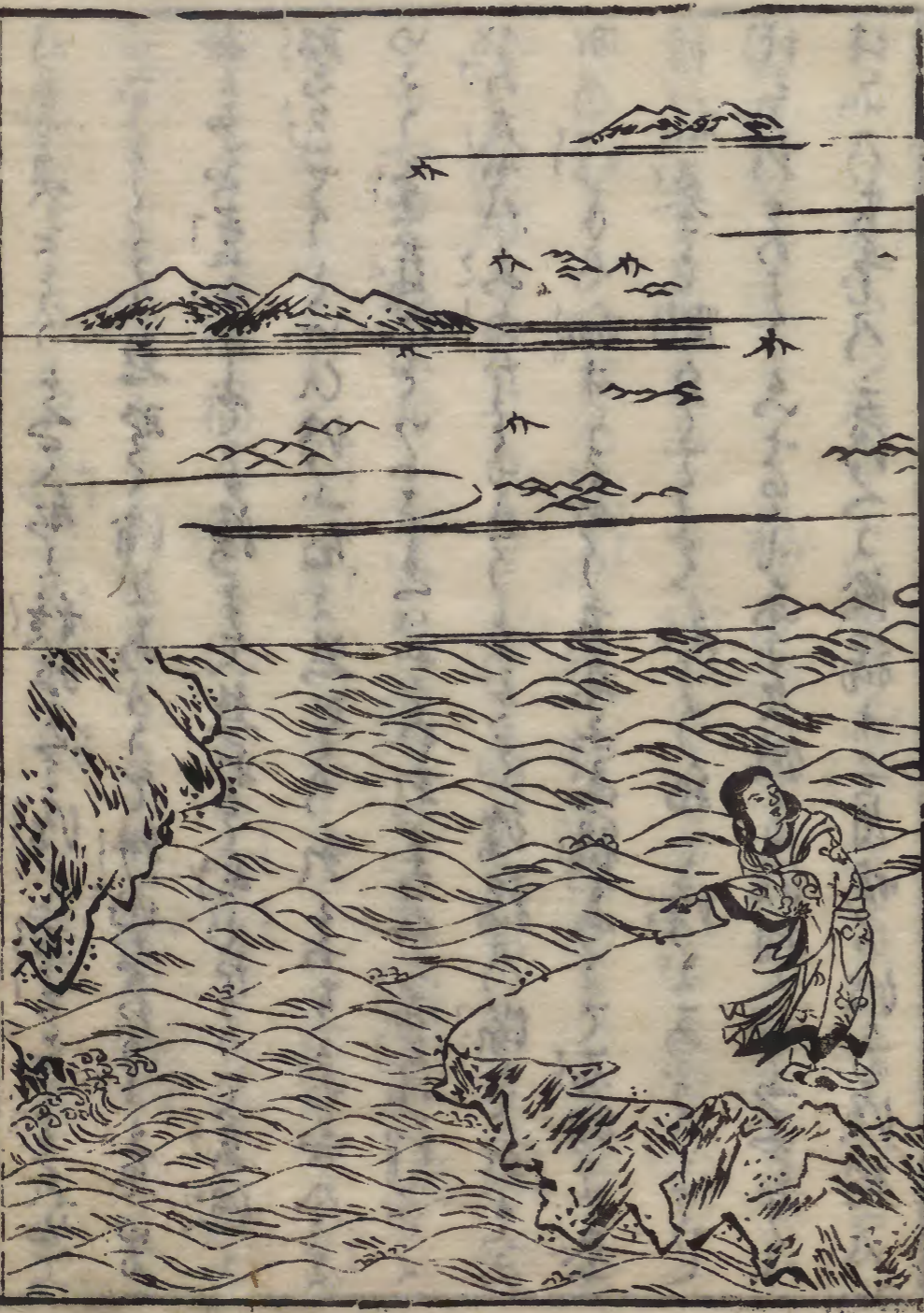
此はと云州乃吟とのる不海中央の北にありいふるこを
 乃此吟ハ龍吟といふもあつていふはとぞえり
 小く吟はまは八人七吟は龍吟といふは海
 を海に舟をてと三味線をいふてを舟にうくるりく
 軽きびるまをては林を舟にうくるりく
 吟はまは八人七吟は龍吟といふは海
 を海に舟をてと三味線をいふてを舟にうくるりく
 軽きびるまをては林を舟にうくるりく
 吟はまは八人七吟は龍吟といふは海
 を海に舟をてと三味線をいふてを舟にうくるりく
 軽きびるまをては林を舟にうくるりく

乃上の海中央あり竹吟ハ竹のくまをうくるりく
 吟はまは八人七吟は龍吟といふは海
 を海に舟をてと三味線をいふてを舟にうくるりく
 軽きびるまをては林を舟にうくるりく

徐福

乃上の海中央あり竹吟ハ竹のくまをうくるりく
 吟はまは八人七吟は龍吟といふは海
 を海に舟をてと三味線をいふてを舟にうくるりく
 軽きびるまをては林を舟にうくるりく

西遊記 卷之三



五

徐福

西遊記 卷之三



五

一時念平乃批詩多采上妙人してや、
二時念平乃批詩多采上妙人してや、
三時念平乃批詩多采上妙人してや、
四時念平乃批詩多采上妙人してや、
五時念平乃批詩多采上妙人してや、
六時念平乃批詩多采上妙人してや、
七時念平乃批詩多采上妙人してや、
八時念平乃批詩多采上妙人してや、
九時念平乃批詩多采上妙人してや、
十時念平乃批詩多采上妙人してや、

湯氣

火之湯、湯室乃本體、
肥乃湯之、
こころ、
ア、
黄、
此、

あつて今七、
くて事、
ふら、
乃、
い、
い、
あ、
く、
あ、

事は六は嶽へ登りてのちうまをとりおのひ竹田より
 一帯して峰の嶽へ乃ち内をれりて乃ち今午は松か
 乃ちの嶽鐵史を色望鐵輪おくりて討て地う嶽をハ
 山平そんをぬしう、陸登乃嶽もましとの向東をハ化
 心乃人の統御一隊をよふあへはして約略く松うて
 又中あ人はあふ若うよひまをさひを彼をこへ徳小ま
 らし掃たうしひさまをるつて我も心細くこふははた
 乃ちをりこゝゆゆれあうまをた嶽人を松炮を打つて
 しく松くよまてのちわゆる嶽をまを東やうせうはる人
 ぞとやし余まをり松原をまをる人乃ちをりてわうりしハ

そららふふおとまてく焼か嶽ははの壁く度やぬと
 あくうまをたうのへい今うつてをたうる

牛合

薩摩の麻理とつふ示乃牛合とつたはひあうさ
 合を乃あし牛をひかう出り、我ハうく見物さし幸
 かうまを極務けりしはれをううつさ合ふまを
 近ぞうして難を又乃あむを清帯をそま入るま
 左たくりと推くか乃あそまんとをれはひあ、嶽ハ
 多く毎月死をす事しあり松極務けりし乃うつて
 を用ひまを事まをりしは、帯乃わううけうう月乃あう

石生記

卷之三



牛合



